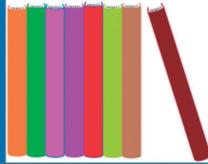




大人が絵本を 第77回 100% 笑顔賞



司書・読書アドバイザー 安藤 宣子*

小児歯科医師 濱野 良彦**

* 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)
** 医療法人元気が湧く 理事ファウンダー

心に響く芸術文化「絵本の日アワード」

「絵本の日アワード in FUKUOKA 2020 エピソード部門授賞式」をご覧いただけましたでしょうか。32ページ程度の画面で構成された絵と言葉が補完しあって成立する「絵本」に備わっているパワーの果てしなさを再確認できたと思います。その限りない力で私たちの人生に寄り添ってくれるのが、絵本というメディアなのです。

2020年の応募408作品の中から最優秀作品1作、館長特別賞1作、優秀作品賞3作の合計5作品を厳選するのですから、選考会は厳正なる吟味で張りつめます。応募されたすべての方に敬意を払い、全作品を尊重したうえで厳しい審査を通過した選ばれし5作品とは、絵本が持つ物語と同じように、とてつもない重みがあるのです。

エピソードグランプリとさっちゃん賞でご紹介しましたように、5つの賞には医療法人元気が湧く「私たちの「願い」」を託しています。2020年優秀作品3作より、絵本と図鑑の親子ライブラリーを創設した私たちの願いと意志をそのまま示した作品、「笑顔賞」を活字のままご紹介しましょう。

 悲喜こもごもの笑顔を引き出す絵本力



絵本の日アワード in FUKUOKA 2020
笑顔賞受賞者 J・Sさま(福岡県)

ごはんを作り、家族で食事と団欒。その後、お風呂に入れて、読み聞かせと寝かせ付け。一人目の育児休暇はそんな生活でした。

年子の姉妹が生まれて、双子のように育てられたらと願っていました。なんと、そしたら願いは叶い、本当の双子に恵まれました。

「お母さん抱っこ」「お母さんちょっと来て」「お母さん聞いて」「お母さん、あのね・・・」お母さんになることに憧れ、願いは叶ってお母さんになれたのに、お母さんと呼び続ける声。そして、泣き声。私は段々、日々の生活に疲れてきました。

どうして呼び続けるの？なぜ泣くの？どんどん、(どうして？)(なぜ？)が積み重なり、ストレスが溜まっていきました。

そんなある日、クマが笑顔でスープを持っている絵本の表紙を見て、自分の理想のお母さん生活を思い出し、この本を購入しました。読んでみると、主人公のくまは私そのものでした。

ひとりぼっちだったくまは、ある日突然やってきたうさぎと、一緒にいるだけで嬉しかったのです。しかし段々、何も言わないうさぎに対してストレスが溜まっていきます。ある日、大きな声で「どうして何も言ってくれないの？」とうさぎに言っています。翌日、うさぎがいなくなります。「そばにきみがいるだけで、ぼくはしあわせだったのに」とくまは泣きます。うさぎがいなくなって、当たり前と思っていた一緒にいることの大切さに気がついたのです。いっぱい泣いて目が覚めて、隣でうさぎが寝ているのを見て、いなくなったのは夢だったと分かり、うさぎを抱きしめます。

娘達と一緒にいることが当たり前になっていた私。私はどんな気持ちで娘達と過ごしていたのでしょうか。私の子供として生まれてきてくれたこと、一緒にいてくれること、それだけで私は幸せです。娘達、ありがとう。

手にするときは！

エピソード 2020

企画 濱野 良彦

構成 木須 信生 ※※※

※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)



ママたちが共感！悩んでいいんです！！

子育ては、子どもが成人したときには「あつという間」と感じるのですが、渦中にいるとき、特に乳幼児期の6年間は必至でしかありません。かわいい我が子。なのに、時にどうして良いか分からなくなったり、距離を置きたくなったり、そして、そんな自分を責めたり。ママたちは、そうやって奮闘しているうちに、気が付くと子どもの成人式を迎えているのです。

そんな子育ての喜怒哀楽を800文字に綴った笑顔賞は今、ビブリオママさんたちに共感を呼んでいます。育児ストレスを見せないお母さまが作品を読まれて、「自分だけじゃないんだって安心しました」と打ち明けられたのです。育児のアレコレを口にする事で上手に気分転換されるお母さまは、「こうやって見つめなおす時間を持つとうと思いました」と感想を述べられました。「この絵本を手元において育児のお供にします」と宣言されたのは、いつも元氣印のお母さまです。

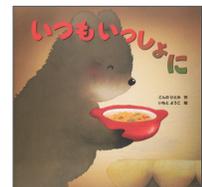
育児中のお母さまに共感を呼び、ストレスを和らげて安心と活力を与えるエピソードは、まさに育児支援そのものです。それは、ビブリオキッズ&ベビー創設にこめた、「医療法人元気が湧く」の願いなのです。小児歯科医療に従事する団体ですが、歯科医療の技術的なことだけでなく、お母さまと子どもたちの心理面に基盤をおいた「文化的医療環境」が必要不可欠と判断して、保育・育児機能を備えた図書施設への進化を実現したのです。つまり、待合室の絵本の存在を発展させてきた経緯は、お母さま方の願いに添うものだと確信できた絵本の日アワード2020となりました。



子育てと絵本と、絵本のエピソードの関係

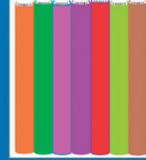
絵本と共にある育児の幸せは、ビブリオヘビーユーザーの親子にとっては日常の一部として根付いています。新しくペンギン通りを訪問する新米ママパパは、それまで知らなかった絵本の力に感動し、お子様の新しい表情に期待して楽しげに通うようになります。私たちはそうやって、親子の間に絵本を介し、会話と読みあいなどのコミュニケーションを通した育児支援に当たっては、お母さまの心のコリを解きほぐす簡易セラピストにもなるのです。

『いつもいっしょに』
こんのひとみ 作
いもとようこ 絵
(金の星社)



嬉しい笑顔も驚きの笑顔も、悲しい笑顔も幸せの笑顔も、ありったけの笑顔を持ち合わせたエピソードは、人と人が対面せずとも、多くのお母さまの育児支援を実現しました。一人のお母さまが出会った絵本との「思い出のエピソード」が、同じような立場にいるたくさんのお母さまたちの心を動かし、共感を生み、今日からの育児の活力としている姿を連日のように拝見し、それだけで私たちはにっこり、ほっこりできるのです。

笑顔賞から広がる笑顔は、ママたちを自然と前向きに突き動かしているようです。「育児書」とは銘打たない、頼りがいのある「育児書」であり、ママの「育自書」となっています。絵本の力、絵本とのエピソードによる力が人を動かす姿は、まるで心理療法のようにも映ります。



「風は西から」ブーム巻き起こる

絵本の日アワード授賞式発表以降、つまり2020年12月に入ってから、『いつもいっしょに』は大人女子の読本量が急上昇しています。絵本だけでなく、笑顔賞のエピソードとセットでブームが巻き起こっているのです。絵本を読んでエピソードを手取るか、エピソード先行で絵本を読むかは人それぞれですが、後者を選択する方が多くみられます。

実は、もっと前にクローズアップされたことのある絵本なのです。2008年2月に出版された本書は、その年5月のテレビ番組で稲垣吾郎氏による朗読が放送されると、一気に話題となりました。今回2020年は、タレントの力を借りずに絵本と、絵本のエピソードの力だけで共感を呼び、今度は九州から全国へ風を送っているのです。

また、発行の同年10月には、けんぶち絵本の里「びばからす賞」を受賞した作品でもあります。この絵本の賞の主催は、北海道剣淵町にある絵本の図書館・美術館「絵本の館」で、一年間に国内で出版された作品を対象として、毎年「絵本の館」に来館した方々の投票で選考されるユニークな絵本賞です¹⁾。日本国内では、「けんぶち絵本の里大賞」のような新たな絵本の賞が誕生しているところに、2017年「絵本の日アワード・エピソード部門」が仲間入りしたというわけです。絵本の賞については、また別の機会にご紹介することにしませう。

絵本作家は、だあれ？

作者を知ると、その絵本に親しみを覚え、読む角度も違ったものになります。絵本作家を知るとは、「大人が絵本を手にするとき」の秘訣です。一人の母親の育児観を変え、そんなエピソードが別の母親へと次々に伝播した根幹となる絵本を描いた作家さんに目を向けてみましょう。

表紙にドーンと描かれた“くま”のタッチをみる

と、もうお分かりですね。何度も紹介して馴染み深くなった、いもとようこ氏の画です。特徴的な技法のほり絵で描かれたかわいい“くま”と“うさぎ”の物語は、子どもが対象のようでいて、内容的には大人向けでもあります。親子が一緒に楽しむ絵本と言えるでしょう。大切な人と一緒に暮らす幸せを感じ、同じように暮らし続けるためにしなければならないことや心の持ちように気づきをくれます。

絵本というメディアは、言葉と絵が補完しあって物語が展開しますので、作家はお話づくりと、絵で表現する作業が必要です。画家である絵本作家が単独で作・絵を創作する形態と、物語作家と画家がコラボレートして共作する絵本とがあります。

いもとようこ氏は、単独創作も共作も行う絵本作家ですが、昔話や名作童話を独自に表現することも特徴のひとつです。『いつもいっしょに』は、物語作家こんのひとみ氏が創作したお話を絵で表現した作品です。

「お互いさま」の気持ちを大事に！

絵本作家こんのひとみ氏は、シンガーソングライターとしても活躍している2児の母で、子育てに悩んだ体験をもつベテランママです。その体験を活かして全国の学校や幼稚園、福祉施設など2000か所以上で「出前ライブ」と称してトーク&ライブ活動を続けている子育て支援リーダーなのです²⁾。

そんなこんの氏は「教育ジャーナル」誌の2009年11月号で、「『お互いさま』の気持ちを大事に」と題したインタビューにおいて次のように発言しています。

～時々“学校にもの申す”という対立した姿勢で権利を主張する親御さんがいらっしゃいます。(中略)

確かに、時折信じられない事件を引き起こす先生が報道されることもあります。だから「わが子を守らなきゃ」という親の気持ちはよくわかります。それでもあえて、「先生、ありがとう」の気持ち

ちをもってほしいのです。親が先生を信頼すれば、子どもも先生を信頼します。教育現場の先生がコンダクターになって、みんながコンダクターを信頼して楽器を演奏すれば、素晴らしいハーモニーが生まれる。結局はそれが子どもの幸せにつながるのだと思います。学校に対して権利ばかり主張する親の姿を見て育った子どもは、やはり自分の主張ばかりする大人に育ってしまうんじゃないでしょうか? ~²⁾

「出前ライブ」では、自ら心を丸裸にすることで参加者の悩みを救い出しているのですが、子育て相談だけでなく、立場の違いで言いたいことが言えなかったり、相手に心を開いてもらえなかったりする学校現場の実態に対して物申していることに共感を覚えます²⁾。

そして、この発言こそが『いつもいっしょに』のテーマだと気付かされたのです。絵本は、読む人の手に渡ったとき、その物語は作者を離れて読み手の物語に変わります。2020笑顔賞受賞者と、そのエピソードを読んだ同じような立場にいるお母さまには、“くま”と“うさぎ”は親子や夫婦、家族の物語となりました。

医療現場に当てはめると、どのような物語が生まれるでしょうか。医療の現場においては、よく「患者は弱者」と言われます。私たちの小児歯科3院では、歯科医師と歯科衛生士と受付スタッフ、そして患者さまが「お互いさま」で「ありがとう」の気持ちを大事にすることを掲げて診療に当たっています。絵本『いつもいっしょに』は、私たちの精神でもあるのです。

子どもの痛みを分かち合っていますか?

『いつもいっしょに』は、『くまのこうちょうせんせい』から始まる、『くまのしんぶんきしゃ』と合わせた「くまシリーズ」です。こんのひとみ&いもとようこコンビが送る、くまの三部作のなかでも第1作『くまのこうちょうせんせい』は、ひととき高く注目

されています。それは、末期がんの告知を受けながら、“命の授業”を行った実在の校長先生がモデルであることが公表されたからです。メディアで報道されると、ほとんどか余命告知に焦点を当てていることに、こんの氏は疑問を抱いたのです。「先生が伝えたいことは、本当は違うんじゃないか? それを表現するには、小さいお子さんでも読める絵本という手段しかないんじゃないか? ガンにフォーカスを当てるのではなく…。」²⁾

そうして、「ガンになって初めて子どものことが見えてきた」と語った校長先生から生まれた『くまのこうちょうせんせい』のあとがきには、「子どもは明るく元気がいちばんと、大人は思いこんでいます。でも本当は、子どもは小さくて弱いものなのです。子どもたちの痛みを分かち合うのが、大人の役目だと思います」とした校長先生の生の言葉が綴られています³⁾。

『くまのこうちょうせんせい』
こんのひとみ 作
いもとようこ 絵
(金の星社)



新型コロナウイルス感染症拡大が長期化し、「いのち」「生」「死」は今日を生きるテーマとなりました。また、医療従事者やその家族への差別は看過できない深刻な問題です。「子どもたちの痛みを分かち合う」こと、「医療従事者の痛みを分かち合う」こと、「お互いさまの気持ちを大事に」すること、そしていのちの尊さを受け止めること、コロナの時代に絵本は読んだ人の生きる力となります。



文献

- 1) 中川素子, 他編: 絵本の事典, 朝倉書店, 東京, pp.596-598, 2011.
- 2) こんのひとみ: 「お互いさま」の気持ちを大事に, 教育ジャーナル 48(8), pp.44-49, 2009.
- 3) こんのひとみ作, いもとようこ絵: くまのこうちょうせんせい, 金の星社, 東京, 2004.